

「緋之衣」

よいち水産博物館 学芸員 中塚凧沙

明治4(1871)年の旧会津藩士団体の入植が、余市町に入った最初の団体入植でした。かれらが入植した8年後の明治12年、会津藩士であった赤羽源八宅、同金子安蔵宅の庭先に余市町では、はじめてのリンゴが実りました。うち、赤羽宅では後に「緋之衣」と呼ばれるアメリカ産のリンゴが6個収穫され、翌年も1本の樹から50kg弱ほども収穫されました。札幌で開催された農業博覧会で出品されたリンゴは好評を博し、リンゴ1貫目(約3.75kg)で白米4升(約6kg)ほどの値段で取引されていたことや、明治35年の余市駅の開業、ロシアへの輸出開始などリンゴの販路が拡大したこともあり、緋之衣を含む余市のリンゴ産業は軌道にのっていきました。

緋之衣という名称は、幕末に京都守護職となった会津藩主 松平容保公が孝明天皇から頂いた「緋の御衣」にちなんで名づけられました。容保公は、戊辰戦争以前、幕府の再強化をはかる公武合体運動を進め、孝明天皇もそれに賛成の立場をとっていました。

「緋之衣」の赤い色は天皇への忠誠の証であり、会津藩士たちの誇りの色といえるものでした。しかし、戊辰戦争に敗れた会津藩士は、逆賊の烙印を押され、江戸での謹慎を経て、余市へ入植し、開墾が行われました。厳しい土地での開墾の最中に実ったリンゴに、かつての誇りであった「緋之衣」と名付けたことは、旧会津藩士たちの心にきざまれていた故郷・会津への強い望郷の気持ちを感じざるを得ません。

また、緋之衣は最初から緋之衣という名称だったわけではなく、「19号」と番号で呼ばれていました。明治時代の緋之衣の原種名は記録によって違うようで、『余市町郷土誌』では「キングオブトムアーワーンテ」、『西洋果樹種類簿』では「キン」、『果樹栽培心得』では「King of Tompkins County」と記されています。また、同じ19号のリンゴでも青森県津軽地方では「松井」とよばれていました。これは道内各地で開拓使から試験的に配布・栽培されていたリンゴの苗ですが、アメリカから輸入した際の番号と配布番号が一部で統一されていなかったことや英語の名称のままでは使用しにくかったことなどから、同じリンゴの品種でも様々な名前がついてしまっていたことが原因のようです。各地でばらばらに付けられた名称のままでは困るということから、関係者によってリンゴの名称を統一する会議(苹果名称選定会・別名帝国苹果名称選定会)が明治27年から開催されました。「緋之衣」という名称が統一されて使われるようになったのは、明治28年11月に開催された第3回会議のことでした。



駅売りのりんごのラベル
(時期不明)



リンゴのラベル(昭和期)

緋之衣は、厳正な審査を通過し、明治から大正、昭和初期という長い期間で皇室に献上されていました。そんな、昭和初期まで余市リンゴを代表する品種となっていた「緋之衣」ですが、現在は幻の品種となっています。しかし、数は少ないですが、余市町はもちろん、「会津藩士のりんご」として会津若松市内で現在でも栽培が続けられています。

参考文献:余市町でおこったこんな話「リンゴ」「緋の衣」「ひろがるリンゴ栽培」「献上リンゴ」、『余市小史』、『余市農業発達誌』、『青森県りんご百年史』